下種の研究（其の一）

松井孝純

目次

緒……四四
一、種子の語意……四五
二、種子なるもの……四七
三、種子をめぐる佛性論諍の概要……五〇
四、天台大師と種子論……五二
1　性修二徳及び三因佛性……五三
2　天台大師と理具一念三千……五五
五、法　種……五七
六、権実と本迹の種子……五九
1　権実二教の法種と佛種……五九
2　迹本二教の法種と佛種……六三

下種の研究
七、迹中と本地の種子……六六
1　迹中法華と本地法華……六六
2　事具一念三千は脱と種……六九
3　本地総別二門の佛種……七二
4　佛種と乗種……七四
5　大王・王女と佛種……七七
結……八二

緒

成佛を以て終局とする法華宗に於て、下種の問題は、最初にして然も最後とも云うべき重要な意義を含んでいる。而して、下種そのものの一般的語意は、種子を下すこと、即ち種子を大地に植えることである。然し乍ら佛教でいう下種は、その趣をやや異にしているものである。

故に、先ずその種子とは如何なるものなりやという義を解明しなけばならない。また、かかる種子思想は何時頃から発生したものであるかという問題も究明しなければならぬ。また、下種という植える方法は如何にあるべきやという問題も解決しなければ本論の研究を全うしたと云えないのである。

然し、これ等を取り上げ乍ら論をすすめようとすれば、広汎なる佛教教理全般に及ぶ勢いあり、到底、短日月の学究では不可能である。故に、問題の中心を失わないように、制限を加えた上に加えつつ、一応、種子思想の発生を印度、中国、日本での佛性論諍の場に求め、その種子思想の跡を訪ねつつ、種子思想の到達すべき極地と思われる日蓮

大聖人の観心本尊鈔の「爾前迹門の円教すら佛因に非ず……」の文に依つて、本地本門妙法蓮華経の佛種子を闡明にしたい。

然し、本論を以ての研究は、下種なるものの追跡途上であること、従つて、浅学菲才が押しすすめた本論に対する叱正および御教導等を衷心より待つ次第である。

一、種子の語意

種子思想の発生および下種思想の変遷を訪ねるにあたり、先ず種子なるものの語意規定を求める為に、弥勒菩薩説、唐の玄奘訳の「瑜伽師地論」を挙げたい。而して、その巻第五十二に

復次種子云何非下析ニ諸行一別有ニ実物一名為中種子上亦非ニ余処一然即諸行如レ是種性　如レ是等生　如レ是安布　名為ニ種子一　亦名為レ果。当レ知此中果与ニ種子一不ニ相雑乱一何以故。若望ニ過去一諸行即此名レ果。若望ニ未来一諸行即此名ニ種子一。如レ是若時望レ彼名為ニ種子一。非下於ニ爾時一即名為レ果。若時望レ彼名レ果　非下於ニ爾時一即名中種子上。是故当レ知種子与レ果不ニ相雑乱一。譬如ニ穀麦等物所有芽茎葉等種子一。於ニ彼物中一磨擣分折求ニ異種子一了不レ可レ得。亦非ニ余処一。然諸大種。如レ是種性如レ是等生如レ是安布。即穀麦等物能為ニ彼縁一令ニ彼得レ生。説名ニ種子一。当レ知此中道理亦爾

以上を要約すると「諸行を分析するに、別に実物があつて種子と名づけるのではない。また、他に種子なるものを求めるわけでもない。過去と未来とを互いに望んで、因としての諸行を果に対して、種子と名けるのである」と説かれている。即ち、一切諸行の潜在態が種子であると云つているのである。

また、瑜伽師地論中の譬喩としてとりあげられた穀麦等物の所に、種子が縁となつて「令彼得生」とあるが、これは種子なるものを縁種とも称しており、極めて意味のある表現である。

次に、種子についての語意規定として、宇井伯寿師の説（佛教思想研究）を挙げると

種子という名は勿論、譬によつて呼んだものであるが、既に種子と名づける以上、果を生ずることを予想しているから、慣性的となつたものは、後に前と同じ業を起すものである。

衣と香とを同一時に、同一所に置けば、香は数〻衣に熏ずるから之を熏習といい、香物は消失しても、香が衣に遺つているのを習気ということになる。習気は習慣性を指すのであるから、次刹那には前と同じことを起さしめる点で、之を果を生ずる因として、種子と称するのである。

と、種子は果を生ずる因であるが、実物があるというものでなく、習気の如く習慣性として、前と同じ業を起さしめるものである。と述べておられる。

次に、世親菩薩の妙法蓮華経憂婆提舎に十種無上を説く初めに

一者示現種子無上故説雨譬喩。汝等所行是菩薩道者。謂発菩提心退已還発者。前所修行善根、不滅同後得果故。

とある。即ち得果の為の種子としての法華経の無上を説くのであるが、種子とは、前に修行する善根の種子としての因が、果を生ずるものであるとの概念をこれに依つても知ることができる。

その他多くの種子の語意規定をする為の文献を挙げることができるが、いずれを取つてても種子とは、果を生ずる因を以て種子と称するようである。

二、種子なるもの

種子なるものについては「瑜伽師地論一百巻のうちの第一巻、巻頭に十七地を説く第一の五識身相応地に

等無間依謂意。種子依謂即此一切種子

とある。この意味は種子があらゆるものの依止となつている。それは一切種子としてのアラヤ識を指すのである。即ち、意はアラヤ識の種子から生ずるものであると説いているのであるが、その後に、種子依は一切種子阿頼耶識なりと、数多くの種子なる語を以て本論を進め、瑜伽観行者の境行果等を詳説し、唯識中道の理に悟入すべきことを示している。また第五十二巻には

復次種子云何非折諸行別有実物名為種子亦非余処……

と種子についての同様の説明がある。

種子については、アラヤ識思想の発達につれて次第に解明されていくのであるが「解深密経に於ては、アラヤ識には種子と結合して考えられている所はない。一切種子心識の種子すら、単に因という程の意味で、而も古くから用いられて居た為に、用いたまでのことであろう」と宇井伯寿師も云つておられるように、種子とアラヤ識との関係が、特殊なつながりを持つように考えられだしたのは、なんと云つても、「瑜伽師地論」や「佛性論」が出て、唯識に対する関心が深まり、佛性論諍が次第にはげしくなつてからであろうと思うのである。

今、瑜伽師地論の摂決択分に於けるアラヤ識と種子との関係について述べると、アラヤ識についての証として一種の文証（解深密経心意識相品の最後にあたる阿陀那識に関する偈をあげている）を示し、八種の理証（識存在の論証

を理論的に訴えたものである）を説き、更に八種の理証は人をしてアラヤ識の存在を確認せしめる正確なものでないからと、従来の説をまとめて示し、同時にアラヤ識の性質をまとめて、四種の義が述べられているのである。即ちそれらの文中にはアラヤ識と種子の関係を、八種の理証のうちの第四に

何故若無二阿頼耶識一。有二種子性一不レ応二道理一……

即ちアラヤ識の存在を認めないと、種子たるものの存在が不可能になる。それは種子は総べてを生ずる因で、六識の生ずるのも種子からである。その種子は心身の何処に在るかといえば、身体に存することは勿論不可能であるし、そうかといっても心の六識にあるとすれば、六識は善心だといっても忽ち不善心になるし、また熟睡時などの時は断絶しているので不合理である。従つて常に同一性を保つて存続するものの中に存在せねばならぬ。それはアラヤ識である。故にアラヤ識は種子の依止所であり。アラヤ識は種子識でもあると、その密接不離な関係を述べている。

次に四種の義の第三に、アラヤ識は諸転識（働く識）の意の為に種子となり、所依となる。また諸転識はアラヤ識の為に種子を長養し、種子を摂植して、後のアラヤ識を生ずしめるのであると

云何建二立互為縁性転相一謂阿頼耶識。与二諸転識一作二縁性一。一為二彼種子一故。二為二彼所依一故。為二種子一者。謂所有善不善無記転識転時。一切皆用二阿頼耶識一為二種子一故。……

即ちアラヤ識は、種子識であるといい、種子の集まりを一全体と見た時の名である。然もその種子から善、不善、無記の転識が生ずるのであるから種子は因で、転識は果であるといえるのである。また、この転識が起ると同時に、その転識はアラヤ識に熏習して、習気を遺す。この場合は転識が因で、習気たる種子が果である。そして、その種子は機会が整えば転識を生ずるか、そうでなければ一刹那一刹那に生滅しながら同類の種子を生じつつ生滅変転する。従

つて後刹那の種子は前刹那の種子の果であり、前刹那の種子は因である。この関係を種子生種子という。

この転識の植えた種子がアラヤ識に摂植され、後刹那の種子を生じていく種子生種子の転識は縁であり、後刹那の種子を摂植されたアラヤ識は果である。即ち種子生種子の両種子の関係は、転識という縁により因果の関係を生ずるのである。然し乍ら種子生現行という観点に立てば、アラヤ識は因と縁とであつて、転識は果であり、現行熏種子という観点に立てば、転識は因でアラヤ識は果となるのである。還言すれば、現行を生じた後の種子は過去の種子として無体になると同時に、現行の中に摂入せられるが、その現行と雖も次の種子を熏習するのであるから、現行はやがて無体になり、熏習された種子が残り、次の刹那には熏習された種子が新らたに現行を生じ、その現行がまた種子を熏習するのであつて、一刹那一刹那にこのことがくりかえされていくのである。

以上の如くに瑜伽師地論には、アラヤ識と種子との関係が述べられているが、結局種子とは熏習された習気であり、その種子が生滅変遷の渦中は絶えず因果俱時の働きを帯び、然も実物としての存在に名づけた物ではないのである。

なおこの種子について種子生現行の立場から、種子に名言種子と業種子とを含めるのである。即ち名言種子とは口舌言語による慣習を実体視したものに、思惟による慣性を実体視したものをプラスしたところのものであり。業種子とは、身体上の業に関して慣習を実体視したところのものである。このような具体的に実体視して種子を考えると、種子は抽象的な理論としての概念だけでなく、種子そのものが一種独特な働きを持つたエネルギーとして存在するものであるということができるのである。

三、種子をめぐる佛性論諍の概要

1　佛性観の両思想

佛性とは、元来は覚悟の本性を意味するものである。この本性が同一人類中に有るか無いかという佛性の有無が問題の中心となつて、印度・中国・日本の三国にわたり長い年月論諍されてきたのである。即ち一切皆成思想（以下、性宗という）と五性各別思想（以下、種宗という）との対立である。

この性宗と種宗の両思想は、一切有性説と一分無性説との対立となり。その佛性の意義に関しては、これを理佛性となすか行佛性となすかの対立でもあつた。即ち、性宗の一切有性説は、佛性は先天的に性得せる悉有であるとし、種性の一分無性説は、佛性は後天的のもので、修得して得られるものであるから、一分のものは得ることができぬと主張したのである。

性宗（一切皆成思想）―一切有性説―性得（先天的）―理佛性
種宗（五性各別思想）―一分無性説―修得（後天的）―行佛性

然しこの両者は、性宗が理想論者であり種宗が現実論者であるが如く対立させて説く者もあるが、両者は、共に実修を必要とする点において一致し、自然法爾の成佛論者ではなく、ただこれを実修のみに求めるか、また実修の基礎として先天的に求めるかにおいて説を分立し、対立したのである。

而して両者は、佛性が成佛の親因であるという点において同調し、長い歳月の間に互いにあゆみ寄りをみせ、やが

て成佛の媒体としての種子と名づくるものを唱えだした。即ち理佛性を真如種子とし、行佛性を無漏種子とし、真如種子は、吾人の心識中に包含するが、無漏種子は、吾人の心識中に蔵せられるべきものなりと妥協点をみいだした。然し両者は、再び本有無漏種子なるものが、一切に具有せられるや、否やに就いて論諍されだしたのである。次に、両者の思想の要点を挙げると

性宗の主張の要点

理性の平等に立つて、この理性を以て親因となし、この親因があるからには一闡提といえども他日発心修行することがある。故に種宗の如く無性という論は、時間の上からのみ考えるためである。発心修行の縁が到来していないという点からのみ無性ということもできるが、それは飽迄無縁の衆生ということである。これを無因だということは絶対できぬと主張する。

種宗の主張の要点

性宗のいう理性の平等は認めるが、然し理性は無為である。故に発心修行という有為の因とはなり得ない。発心修行の有為法は行佛性の本有無漏種子に求めねばならぬ。一闡提には発心修行の意志がない。故に無性であり、他は有性である。性宗のいう真如種子は所縁縁、増上縁だが親因ではない。親因は本有無漏種子にのみあり、無性は無縁だけでなく無因であると主張する。

2　両思想対立の原因

かかる性・種両者の対立が、どこから発生してきたかというと、一闡提を如何にとりあつかうかという問題に対

し、涅槃経が訳された初め頃は、一闡提の不成を説きながら、後には、佛と一闡提との二人に、俱にある佛性あり。共になき佛性ありというに及んで、俄然として教界の大問題に発展したのである。即ち涅槃経如来性品の初めで、徹頭徹尾一闡提の不成佛を極言している。例えば、

一闡提ヲ除キテ其余ノ衆生、コノ経ヲ聞キ已リテ悉ク皆能ク菩提ノ因縁ヲ作ス

また同じく現病品に

世ニ三人アリ其ノ病治シ難シ。一ニハ大乗ヲ謗ル。二ニハ五逆罪ナリ。三ニハ一闡提ナリ。是ノ如キ三病ハ世ノ中ノ極重ニシテ悉ク声聞、縁覚、菩薩ノ能ク治スル所ニ非ズ

ところが如来性品第四に至ると

衆生ノ佛性モ亦復是ノ如シ、常ニ一切ノ煩悩ノ為ニ覆ハレテ見ルコト得ベカラズ。是ノ故ニ我レ衆生無我ト説ク。若シ是ノ大般涅槃微妙ノ経典ヲ聞クコトヲ得バ、則チ佛性ヲ見ルコト象牙ノ花ノ如クナラン

と云い、又同じく後の方の二十七師子吼菩薩品に

我レ常ニ宜説ス。一切衆生ニ悉ク佛性アリ、乃至一闡提等ニモ亦佛性アリ。一闡提等ニハ善法アルコトナキモ、佛性ハ亦善ク未来有ナルヲ以テノ故ニ、一闡提等モ定ンデ常ニ阿耨多羅三藐三菩提ヲ成ズルコトヲ得ベキガ故ナリ

と全く反対の説を述べているのである。従つて同じ涅槃経の中のこの相異する両説に対する信奉者たちの帰結は、互いにしのぎをけずる諍論となつて現われてきたのである。

四、天台大師と種子論

1、性修二徳及び三因佛性

前述の如く性宗は真如を以て種子となし、これを真如所縁縁種子としたのに対し、種宗では、真如を所縁とする無漏種子を以て、真如所縁縁種子となしたのであるが、共に一長一短あるため長年月の論諍を呼んだのである。然し、この両者の対立も六世紀後半に入ると、天台大師によつて、その一念三千論にまとめられ、性徳・修徳及び三因佛性説を以て論ぜられたのである。即ち、天台大師が特に唯識論者と論諍を交えたというほどのものもないままに、それらの短を去り、長を採り大師独特の佛性観を祖述したのである。然もその三因佛性説は、これに批議を加える者なく当時の教界を風靡したのである。

即ち、大師は性徳・修徳について先ず論じられた。即ち性徳とは、吾人の心性は本来具している本有の理であるとし、この性徳の理とは、空仮中三諦、理具三千、真如、佛性、中道、如来蔵等と名けられるものであるとされたのである。次に修徳とは、転迷開悟の修行であつて、これに智と行との別を分け。智とは心性本具の理を照す所の一心三観の智であり、行とは事の善業であつて、いわゆる世間もしくは出世間の善事を皆この中に収めるのである。

而してこの性修二徳の別円二教にわたる関係を以て結論されたのである。即ちこの二徳を別なるものと分けて説くのが別教の所談であるとし、この二徳を修性一如、修性不二なりとし、二徳は本来融即し一体不二なるものとして説くのが円教の所談なりとされたのである。更に、二徳を修二性一に分け修の二（智と行）を能顕とし、性の一（理）を所顕とすることを別教の所談とし、円教の所談としては、この能顕と所顕の二徳を一体不二、本来相即円融するものなりとするのである。

即ち別教に於ては、性徳の理はその体、霊妙で極めて超越的のもので、九界の諸法とは全然没交渉であるから、吾人の日常生活とは少しも関係をもたぬものである。故に、別教所談の性徳は、吾人に転迷開悟の修徳を発起せしめることができない。従つて修徳は、性徳の外にあり、断迷開悟のために発起し、薫修するものであるとなす。然しながら円教に於ては、吾人本具の性徳の理に本来三千の事用を具していて、この性徳の三千が外に現われたものが、吾人の日常生活のすべてである。従つて吾人が転迷開悟のために薫修するところの修徳の智と行とは、全く性徳の理から顕現したものである。即ち性徳を全うして起した修徳であつて、修徳智行の全体は、本来これ性徳の理であるとなすのである。例えば、円教所談の性・修二徳の関係は、燈火と燈光の関係の如く、燈火（性徳）は常に燈光（修徳）を放ち、燈光（修徳）は却つて燈火（性徳）の体を見せているようなものである。

以上の如く天台大師は、修性の関係を円教の立場から説き、修行者の行う一心三観の観智も、持戒修善の万行も、すべて行者の心性に本来具している心性たる佛性の顕現であるとみられたのである。従つて、この佛性が吾人自らの求道や善智識の指導等の種々の因縁によつて顕現したものであり、この顕現こそ性具三千の顕現なりとみるのである。故に円教の行者が修行する所の行法は、一として本理に即し、真如法性の理に通徹せざるものなしというのである。

この道理を敷演して正了縁の三因佛性とされたのである。一に正因佛性とは、佛の本体が衆生に具しているのを正因と云い、これが成佛の正因となるので正因佛性という。二に了因佛性とは、了は照了の智徳であり、正因の本体が照了の智に照らされて成佛するのであるから、性徳は正因の佛の本体であると云つても、智の照了をまたねば佛徳が光顕しないので了因佛性という。三に縁因佛性とは、了因の智用を助けて、正因の佛性を光顕させる諸縁をいうので

あつて、万善万徳の諸行である。従つて性徳は正因佛性、修徳の智は了因佛性、修徳の行は縁因佛性によつて起るものであり、この三因はその体、別在するものでなく、ただ一法の徳用である。即ち正は了・縁を具し、了は正・縁を具し、縁は正・了を具して三種相融相具し、一即三、三即一の関係をもつている。従つて修徳の功成じて性具の三佛性が顕発すれば、三徳涅槃の佛果も互具互融、不縦不横であるとみる。

天台大師は、この世界を本体上から論究（理具三千論）しても、これを現象上から観察（事造三千論）しても、畢竟するところ三千円融の一大真如界であつて、吾人は無始より已来この大真如界に生活しつつあり。故に吾人が日常の行往坐臥のうちにおいても、つねに法身如来の光明が輝き常楽我浄の天楽が響きわたつている娑婆即寂光土である。然るにこの世界を生老病死の苦とみたり、貪瞋痴の悩みありとなすのは、実は随縁真如（事造三千）が千差万別の活動をなすからであると説く、これこそ理具三千と事造三千の関係にして、このような世界を迷悟不二、生佛一如の三千円融の教理として受けて立ち、性徳を全うして起つた修徳の行たる一心三観の観智を以て、遂いに所観の一境三諦の理に一致冥合して一念三千の悟りを開くのである。このように事造三千の現象界に対し本有修徳の智行を以て、理具三千の真如実相の境界に入ることを理想とし、その立場から一切衆生悉く佛性（理具一念三千）有りとし、この吾人本具の理具一念三千の佛性を、成佛の種子とみなされたのである。

2、天台大師と理具一念三千

天台大師は、衆生成佛の大原理を一念三千の法門として法華経の文裏より発得されたのである。この三千を即空・即仮・即中の三諦円融一諦を法界の真理として、この法界の真理が一切万法に遍満し、佛法界の如来にも、九法界の

衆生にも同じように具足していると指摘し、

法界円融者、色心依正以レ即レ性故。趣指二一法一遍摂二一切一、諸法遍摂亦復如レ是、法法互遍皆無二際畔一、乃以二無界一而為二其界一、此之法界無レ不二円融一、即百界千如百如千界也。是故得レ云二唯色唯心唯依唯正一。若不レ爾者、即非二円融一。

と述べられた。

この法界の理法たる三千を全面的に証悟し、果徳として全現するとき、如来となるのであるが、迷える我等凡夫が、この三千を広漠無辺な九法界を対象として証得することや、高遠得妙な佛境界について証得することは、到底不可能であることを天台大師は知られて、摩訶止観に彼の有名な

夫一心具二十法界一　一法界又具二十法界一百法界一界具三十種世間一　百法界即具三三千種世間一此三千在二一念心一若無レ心而已　介爾有レ心即具三三千一　亦不レ言二一心在レ前一切法在レ後　亦不レ言二一切法在レ前一心在レ後

と述べられて、我等の已心所具の三千即三諦の妙理を修証しなければならないことを教えられたのである。即ち一念三千の「一念」は迷える我等凡夫の一刹那心であり、刹那刹那に転変推移する心であつて、この些細な心の中にも三千という真理が具足しているといつて、我等はこの迷いの一刹那心を対境として、三千即三諦の妙理を観じていけば、開悟すると教えられたのである。即ち妙楽大師も

当に知るべし、身（十界の正法）土（十界の依法）は一念の三千（理具の三千）なり、故に成道の時、此の本理に称ふて一身一念法界に遍す

と云われている。

これらのことは、本来本然として存在している真理たる理の三千を、釈尊が自らの信行によつて証得し、これを法界の万法に具現して事具の三千とし、我等凡夫の一念に事具三千として具さしめられた。而してこの事具三千を、我等の本具の三千であると知らしめられたのである。従つて天台大師が示された所の理具三千は、たんなる真理ではなく既に無量無数劫の久遠佛が、証得し給うた所の理具三千なのである。この事は提婆達多品の

我レ釈迦如来ヲ見タテマツレバ、無量劫ニ於テ、難行苦行シ功ヲ積ミ徳ヲ累ネテ菩提ヲ求ムルコト、未ダ曾テ止息シタマハズ。三千大千世界ヲ観ルニ乃至芥子ノ如キ計リモ、是レ菩薩ニシテ身命ヲ捨テタマフ処ニ非ルコト有ルコトナシ

の経文が示す通りである。故に我等衆生も本来、久遠の釈尊によつて荘厳された佛子であり、法界の一草一木一塵一法と雖も、本佛の顕現であり佛子である。且つ菩薩であつて、単なる物質でなく、有情非情をえらばず万法悉く佛子、菩薩である。即ち能荘厳の本佛によつて荘厳された所荘厳の我々には、即ち佛に成る因たる理具一念三千の種子を播種されているのである。この種子が次節で述べるところの法種に相当するのである。

五、法　種

法種なる語は法華経の結経たる観普賢菩薩行法経に

此大乗経典諸佛宝蔵。十方三世諸佛眼目。出三生三世諸如来一種。持三此経一者即持三佛身一即行三佛事一。当レ知是人即是諸佛所使。諸佛世尊衣之所レ覆。諸佛如来真実法子。汝行三大乗一不レ断三法種一

とあり。また華厳経第七に

発菩提心……佛種…法種……僧種…

とあり。また日隆聖人の本門弘経抄には法種の内容について説明を加えられて、

止観の一部は専ら法種を以て種子下種と為すなり。謂く法種は実相なり。三諦なり。中道法身なり。諸部の円妙なり。猶ほ止観の意は別教の証道、通教含中を以て円理に同じて下種と成すと云ふ是れなり。仍て此の法種分をば初め華厳の円方等般若より修して今経迹門に至るまで之を明かす。開未開の諸部の円理実相を悉く法種と名づくるなり。迹門十妙の初めの境妙智妙等大通下種も法種なり。法種と云ふは佛母実相の悲母の辺を以て正意と為す。種子下種を論ずる故に実を以て之を思ふに真実の下種には非ざるなり。故に爾前迹門に明かす体用本迹の体の法身に於て之を論ず。此の法種は熟脱の上に於て之を論ずるなり。

諸天台宗爾前迹門に通じて下種有り、得道有りと云ふは、此の法種の辺を下種と意得て日蓮宗を誣ふるなり。此の法種をば三種の教相の中の初重二重に之を明かし、第三重には真実の佛種を明かすなり。（日降聖人全集第一巻）

と仰せられている。即ち法種とは、諸法実相の理であり、三諦円融の理であり、中道法身である。従つて天台大師が説かれた所の理具一念三千の理体をば法種となされたのであつて、妙楽大師が「当に知るべし、身土は一念三千なり、故に成道の時此の本理に称ふて一身一念法界に遍す」と述べられたとおり、たんなる真如の理でなく、境智冥合の佛果を法種と称されたのである。従つて天台大師が文句三に

理は是れ真如なり。真如は本より浄し有佛無佛によつて常に変易せず

と説かれた所の佛の有無に関係せずある常住の真理は、法種となり得ないのであつて弘経抄の文の「開未開の諸部の円理実相を悉く法種と名づくるなり。迹門十妙の初めの境妙智妙等大通下種も法種なり」とある成佛の種子を法種と

称するのである。

彼の性宗と種宗が論淨した佛性論は、性宗のいう一切衆生悉有佛性の故に一切衆生の成佛を説くのに対し、種宗が五性各別を立て一闡提の如き因果の道理を揆無せる断善根の衆生は、発心修行の信なきものとして畢竟無性の故に成佛せずと主張したのであるが、有佛無佛の真如の論争より早く抜け出て、この法種が一闡提にに有るか無きかの論争になり、この法種は久修劫証得の佛陀から本有として受けたが、一闡提の輩はその善根すら断尽した為、無因の故に成佛せずと種宗は結論して譲らなかつたのである。

然しこれら両者の対立も弘経抄の文の「此の法種の辺を下種と意得」て、その誤謬を主張したところに種宗の論旨があり、「開未開の諸部の円理実相を悉く法種と名ずくる」ところのものと錯角したところに性宗の主張があり、結局、日隆聖人が「法種と云ふは、佛母実相の悲母の辺を以て正意となす。種子下種を論ずる故に、実を以て思うに、真実の下種には非ざるなり」との仰せどおり、下種の種子にならない法種を成佛の親因の如く論じ合う所に、彼の両者の論諍の場があつたのである。

即ち法種なるものは、成佛の直接原因となる種子ではないが、釈尊の成道と同時に一切衆生本有の理具一念三千として開顕された佛性なのである。観普賢菩薩行法経の「諸佛世尊衣之所覆。諸佛如来真実法子。」とあるとおりであり、提婆達多品の「芥子ノ如キ計リモ是レ菩薩ニシテ身命ヲ捨テタマフ処ニ非ルコト有ルコトナシ」である。

六、権実と本迹の種子

1、権実二教の法種と佛種

爾前権教の種子を法種、法華実教の種子を佛種と称するのである。然し本迹の種子を論ずる段になれば迹門の種子は法種となり、本門の種子は佛種と称することになる。先ず権実二教の種子について論ず。大聖人の観心本尊抄に

夫れ以れば釈迦如来の一代の顕密大小の二教……大日金剛頂等の千二百尊も但だ其の近因近果を演説して、其の遠の因果を顕さず……華厳経大日経等は、一往之を見るは別円四蔵等に似たれども、再往之を勘ふれば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず。本有の三因之なし、何を以てか佛の種子を定めん

とあり。即ち十方より来集せる千佛、大日経金剛頂経等に説かれたる千二百余尊、これ等諸経の諸佛は皆化身若しくは影現佛であつて、これ等の影現佛の本体であり能説の教主たる釈尊は、印度伽耶近成の権佛であるから、権佛の資格で近成始覚の因果のみを演説されたにすぎない。本門に到つて始めて開顕される近遠の因果は未だ顕説されていないのである。故にこれ等の爾前権教には久遠の因果を説かないから本有の性了縁の三因佛性が本有として衆生に具していることを知らない。従つて爾前権教によつて、成佛の種子を定めることは出来ない。元来佛種は久遠本有であつて、久遠の説なき所に佛種は無いのである。そこの所を日蓮大聖人が本尊抄に御指摘されたのである。また八宗違目鈔にも

小乗経には佛性の有無を論せず。華厳方等般若大日経等には、衆生本より正因佛性のみありて了因縁因無し。法華経には本より三因佛性あり

と申されており、本尊抄に「本有の三因之なし」と云われたのは、爾前権教の蔵通は灰身滅智の佛果を標榜する故に、奪つて三因之なしと仰せになられたのである。

元来正因佛性とは、聖人の私新抄に

正因佛性とは十界依正万法の理性に法界周辺の功徳を具する是なり。此の性は三世に周辺して常住不退なり。

と指南されておられる如くであるが、他の了因佛性、縁因佛性は修徳の佛種であつて、正因佛性が性徳であるのとは趣きを異にしているのである。即ち聖人の私新抄に

道仰せに云く、佛種に於て修徳性徳の不同之れあり、修徳の佛種とは或従知識、或従経巻して聞法結縁する。是れを修徳の佛種と名く……性徳の種とは三因五佛性是れなり、又性徳の中に於て修性を分つ時は、正因佛性は性徳、縁了佛性は修徳なり。

とある通りである。また大聖人の一代聖教大意に於て

蔵通二教には佛性なし。但だ菩薩の発心を佛性と云ふ。別円二教には佛性を論ず。但し別教の意は二乗の佛性を論ぜず。爾前の円教は別教に附して二乗の佛性の沙汰なし、此等は皆麁法なり。今の妙法とは此等の十界を互具すと説く時妙法と申す。……法華経とは別の事なし、十界の因果は爾前の経に明す。今は十界の因果互具ををきたてたるなり。

また聖人の本門弘経抄には

開未開の諸佛の諸部の円理実相を悉く法種と名く

と申されている。かくの如く爾前権教の種子は十界不具足の法種であり、未開の諸部の円理実相の法理であり、本有の三因佛性これ無しとまで指摘された正因佛性があつて、性徳の法種と雖も伽耶始成権佛の説き出されたところの法種である。

然るに実教たる法華経の佛種は、一大聖教大意にもある如く「法華経とは別の事なし、十界の因果は爾前の経に明

す。今は十界の因果互具ををきたてたるなり」また八宗違目鈔にも「法華経には本より三因佛性あり」とも、当躰義抄に

日蓮云く、此の経は是れ十界の佛種に通ず、若し此経を謗ぜば義是れ十界の佛種を断ずるに当る。是の人は無間に於て決定して堕在す。何ぞ出づる期を得んや

また開目抄に爾前権教と後八年の法華経の実教とを相待して

茲に予愚見を以て爾前四十余年と後八年の相違を勘へ見るに、其の相違多しと雖も、先づ世間の学者（天台の学者）も許し我もさもやと打ちおぼうることは二乗作佛久遠実成（法身実在の久遠実成のことで天台学者の久遠である）なるべし

とも申され本尊抄に

詮ずる所は一念三千の佛種に非らざれば有情の成佛、木画二像の本尊（非情の成佛）は有名無実なり

また開目抄に法華実教の示す所の迹門理具三千の佛種を明らかにされて

但だ天台の一念三千こそ佛になるべき道と見ゆれ

とも述べられて、爾前権教の不具足十界、未開の円理たる法種に対し、開権顕実の法華経は十界互具、三千円融、十界の佛種に通ずるものである。また日隆聖人が、

佛種とは、人法の中には人に約す

とも仰せられたように、権実相待に於ける種子の関係は、法に約した爾前の種子を法種と称し、人に約した大通覆講時の種子を一応佛種と称されたのである。今左にこの両者の種子を相待し図示すれば

- 爾前諸教（権教）―法種
  - 伽耶始成の権佛―性徳の佛性
  - 諸部未開の円理―十界不具の法理
  - ―約法
- 迹門法華（実教）―佛種
  - 大通近成の迹佛―修徳の佛性
  - 諸部開権の円理―十具互具の実相
  - ―約人

2、迹本二教の法種と佛種

以上の如く実教たる法華に限つて一応佛の種子が明らかにされ成佛への道が開かれたのであるが、然しその法華経に至ると迹本二教の法種と佛種との区別が生じてくるのである。本尊抄に

迹門爾前之意を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覚の佛也。本門を以て之を疑はば教主釈尊は五百塵点已前の佛也

また開目抄に

迹門方便品は一念三千二乗作佛を説て、爾前二種の失一つ脱れたり、しかりと雖もいまだ発迹顕本せざればまことの一念三千もあらはれず。二乗作佛も定まらず。水中の月を見るが如し根なし草の波の上に浮べるに似たり。本門にいたりて始成正覚をやぶれば四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を説き顕す。此れ即ち本因本果の法門なり。

と申されて本迹二門の勝劣を明らかにされた。また十章抄に

一念三千と申す事は迹門にすらなほ許されず何に況や爾前に分たへる事なり。一念三千の出処は略開三の十如実相

なれども義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但だ真実の依文判義は本門に限るべし

と申されて、迹門の理具三千の種子は本門のために廃迹され、その上に一品二半脱果の事具三千本門の佛種をあらわされたのである。本尊抄にも

一品二半よりの外は小乗教、邪教、未得道教、覆相教と名く、其の機を論ずれば徳薄垢重幼稚貪窮孤露にして禽獣に同じきなり。爾前迹門の円教すら尚ほ佛因に非ず。

とも申されて、迹門の佛種をば始成正覚、近因無常の佛種であつて、本門の佛種の立場より有名無実の佛因なりと廃迹されているのである。日隆聖人は此の意を受けて

本門には「本門正意顕寿長遠」と云ふ故に本の十妙の初に本因本果を置て廃迹顕本して三千を成ず

本門十妙の初に本因本果を置く、本因本果は本地久成の報佛なり。此の報佛を以て唯我一人の三世益物の主師父とするなり……此の本因本果の父大王の本智を以て大通下種の時の境妙妃の法種（実相円理）に冥して、境智冥合して大王（本地報身）の佛種を二乗に下して、父母子和合して九界の王子と本佛界の父大王と父子天性を結び、十界互具して真の三千妙法蓮華経（別体事具三千の妙法蓮華経）も顕はれ、十界久遠も顕はるるなり。……此の意を観心抄に釈して云く、一品二半より外○爾前迹門の円教尚ほ佛因に非ずと云云、故に本門の十妙の初めに本因本果を置いて廃迹顕本して三千を成ずる。故に此の本因本果の三千を以て種子下種、佛種となすなり。開目抄に云く、爾前迹門の十界の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を説き顕はす。是れ即ち本因本果の法門なり云云（日隆聖人全集第一巻）

と仰せられているのである。

従つて迹本二教の相待の上から迹門の種子を約人の立場から大通覆講の近成、近因として廃迹され、本門の種子を脱果の事具三千の佛種として開顕されたのである。

さて権実相待に於て一応佛種と称せられた実教の佛種も本尊抄で「尚ほ佛因に非ず」と廃されて廃迹顕本され、改めて迹門の佛種は法種と称せられるのである。即ち本門弘経抄の

止観一部は専ら法種を以て種子下種と為すなり。謂く法種は実相なり三諦なり中道法身なり諸部の円妙なり……此の法種の分をば初め華厳の円、方等般若より修して今経迹門に至るまで之を明す。

法種とは専ら爾前迹門に明す。法とは実相法身なり。佛実相と云つて実相法身を以て○所縁の境に譬ふ。

所詮法種と云は、法は実相なり。実相をば「迹門正意在顕実相」と云ふ間、迹の十妙の初に境妙を置くなり

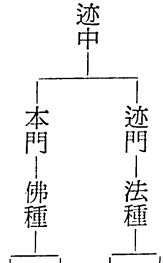
迹門十妙の境妙智妙等大通下種も法種なり。法種と云ふは佛母実相の悲母の辺を以て正意と為す。種子下種を論ずる故に実を以て之を思ふに、真実の下種に非ざるなり。故に爾前迹門に明す躰用本迹の体に於て之を論ずる。……

此の法種は熟脱の上に於て之を論ずるなり此の法種をば三種教相の中の初重二重に之を明し、第三重には真実の佛種を明すなり。（日隆聖人全集第一巻）

等の文によつても明らかな如く、迹中諸経爾前迹門熟脱の佛性たる理佛性は法種と称するのである。即ち法種と称せられる種子は、迹門十如実相三諦円融の円理実相の理具三千の境妙と、大通近成の迹佛の境智冥合して成じた佛種である。然し智が無常の迹佛なる故、境妙の円融実相の辺をとつて法種となすでのある。佛種と称せられる種子は、本門六句実相の境妙と久遠成道常住の本佛とが境智冥合した一品二半脱果の事具一念三千であらねばならぬ。

従つて迹本二教の法佛二種の関係は、理事の一念三千の関係でもある。即ち迹門の種子たる法種に依る成佛は、大通王子覆講の時に使われた種子で爾前迹門果頭近成の迹佛であるため、妃母たる円理実相の辺にしたがつた成佛であつて、本尊抄の「王女たりとも畜種を懐妊すれば、其子尚旃陀羅に劣れるが如し」と申された結果に終り、迹門の種子は名は種子であるが、下種の法体とならない無常の円理、理具一念三千である。前述の如く人法に約していうならば、人法のうち法に約されたものである。

次に本門の種子たる佛種に依る成佛は、久遠成道の報身佛（脱益正意佛）たる人に約された種子であるから、妃母たる円理実相の境妙と境智冥合し、一品二半脱益を得る佛種となり、「草木にも成り給える寿量の釈尊」たる事具一念三千の常住の法体ともなるのである。此の両者の関係を図に表わすと



七、迹中と本地の種子

1、迹中法華と本地法華

以上論じた種子は、権実及び迹中の迹本相対の上に於ける法種佛種の関係であつたが、其後に迹中法華と本地法華

の二種子を佛種と乘種に区別し、真の末法の為の種子について論じたい。先ず迹中、本地について日蓮大聖人の治病抄の御教示を拝ぐと

法華経に又二経あり、所謂迹門と本門となり、本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華経との違目よりも猶ほ相違あり。爾前と迹門とは相違ありと雖も相似の辺はありぬべし。所説に八教あり、爾前の円と迹門の円は相似せり。爾前の佛と迹門の佛は劣応勝応報身異なれども始成の辺は同じきぞかし。今は本門と迹門とは教主已に久始のかわりめ百歳の幼子の如し、弟子又水火なり。土の先後いうばかりなし。なを本迹を混合すれば水火を弁へざる者なり。

この御書は単に法華経の迹本二門を相待するという意味ではない。即ち迹門とは垂迹佛が説いた三世十方の微塵の教経を通じて迹門となすのである。故に迹門とは垂迹門の意味であり垂迹教の事である。その反対に本地佛が説いた教経を本門となすのである。故に本門とは本地門の意味であり本門教の事である。従つて今日出現の釈尊所説の一代五十余年の教経は、本地佛から垂迹した垂迹佛の垂迹教であるから、垂迹の化縁が尽きれば垂迹佛が説いた教経も滅尽してしまうことは明白な道理である。此の故に本尊抄に

夫れ始め寂滅道場華蔵世界より沙羅林に終るまで、五十余年の間、華蔵蜜厳三変四見等の三土四土は皆成劫の上の無上の土に変化する所の方便実報寂光安養浄瑠璃蜜厳等諸佛随て滅尽す。土も又以て是の如し。

とあるのである。

この様に本門法華経は久遠の本地佛が説いた本地の法華経であつて、三種教相の法華経のうちの第三重の法華経であり、五味主と判ずる所の本地の法華経である。その反対に諸経は、五味と判ずる迹門法華経であつて、初重、二重

の法華経は迹門法華経である。この故に迹門と本門の二経の相違は水火天地の違目があり、教相も観心の法体も全く異なつてくるのである。

諸経を五味と判ずる迹門法華経は初重二重の法華経であつて、諸法実相を以て経体とする法華経である。法華経を五味主と判ずる本門法華経は第三の法華経であつて、妙法蓮華経を以て経体とする法華経である。此の故に「本迹の相違は水火天地の違目なり」と仰せられたのである。更に

今迹門と本門とは教主已に久始のかわり目、百歳の翁と一歳の幼子の如し又弟子水火なり。土の先後いうばかりなし。なを本迹を混合すれば水火を弁へざる者なり

と、迹門法華経の教主は始成正覚の佛であり、迹佛であり、所説の教法は諸法実相であり本地法華経の教主は久遠実成であり、本佛であり、所説の教法は妙法蓮華経である。此の様に教主も教法も迹中と本地では異なるものである。従つて成佛の種子も自ら異なる。即ち本尊抄にその違いを

一品二半よりの外は小乗教、邪教、未得道教、覆相教と名く、其の機を論ずれば徳薄垢重幼稚貧窮孤露にして禽獣に同じきなり。爾前迹門の円教すら尚ほ佛因に非らず。

と仰せられて本地別体一品二半の佛種子以外は成佛の因でないと爾前迹門等の教経を廃迹されておられる。そうして同じく本尊妙に

本門は序正流通倶に末法の初を以て詮と為す。在世の本門と末法の初は一同に純円なり。但し彼れは脱、此れは種なり。彼れは一品二半（の事具一念三千）此れは但だ（本門八品の）題目の五字なり

と更に仰せられて、迹中迹門と本門の相違より、更に本地別体門の事具一念三千を顕説され、次いで本地本門の佛種

子を顕説されたのである。

2、事具一念三千は脱と種

開目抄に

迹門方便品は一念三千二乗作佛を説いて、爾前二種の失一つを脱れたり。しかりと雖もいまだ発迹顕本せざればまこと（実）の一念三千もあらわれず。……本門にいたりて始成正覚をやぶれば四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を説き顕す。此れ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて真の十界互具百界千如一念三千なるべし

と仰せられているが、これは爾前諸経及び迹中迹門の一因一果の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を顕わされたのである。而して「真の十界互具千如百界一念三千なるべし」と、迹中迹門までは始成を存する迹因迹果の故に二乗作佛も定まらず、真の一念三千も成りたたないから廃迹顕本して、迹因迹果の理具一念三千を廃迹し、真実の十界互具百界千如事具一念三千の法門が成立する。即ち理具一念三千の教法は廃迹されるべきものであり、事具一念三千の教法は顕説されるべきであるという道理がでてくるのである。然も此の事具一念三千は日隆聖人の私新抄に

今経の本門独り久遠の根本釈尊の功徳を説顕して、爾前迹門の佛菩薩等の経々の功徳法門を悉く破廃開会して、久遠本地の無作一佛、根本の釈尊の躰内に流入せしめ畢つて、一切諸佛菩薩、経々、衆生の成佛、功徳を悉く本の名体を破廃して、本門寿量品（本地別体門の一品二半の寿量品）の本地佛に帰入し、本地の地涌の一菩薩に還帰し、一切の経々を会して今経の寿量品に帰せしめたまへり……既に今経の久遠本地の一佛より、迹を十方三世に垂れて

分身散影せり。分身の迹をして寿量品の本地の本佛に帰せしむべき者なり。此の時は今経本門寿量品の南無妙法蓮華経（別体事具三千の南無妙法蓮華経）は是れ十方三世の一切諸佛菩薩、人天四衆八部、十法界の成佛の種子なり。爾前迹門の経々は（実相の理具三千は）一切佛菩薩等の種子に非ず、根本に非ず、佛の神に非ず、今経（本地別体門）の寿量品の妙法蓮華経は、釈尊地涌計り一切経々、佛菩薩の本地の種子なるべし

と仰せられている如く、迹中に於ける顕説された迹門理具一念三千と本門事具一念三千の理佛性と修得佛性との比較により、本門事具一念三千の佛種こそ成佛の種子なりと顕説されたが、本地門に於ける佛種子の相待になると、その迹中本門の事具一念三千と雖も私新抄の文の如く「爾前迹門の佛菩薩の経々の功徳法門を悉く破廃開会して、久遠本地の無作一佛、根本の釈尊の躰内に流入せしめ畢つて」そこでの相待を経なければ、真実の佛種子が開顕されないのである。従つて更に私新抄で

爾前迹門本門の序正流通の三段を畢つて、本門に於て又三段ありと之を判ずる時、又本門に於て序正流通あり。

と申されたのである。而して其の本地本門に於ける一品二半本地別体門の事具一念三千について

開迹顕本の上に三世十方法界の微塵の経経に約して序正流通を判じて、三世十方倶に爾前迹門は熟脱にして下種に非ず。一品二半は真の下種なり。得脱なりと定めて、一切衆生の真実の下種は久遠本地寿量品（本地別体門の一品二半の寿量品）の妙法蓮華経の一念三千なるべしと云ふことを釈し顕すなり。

と、事具一念三千には種子としての佛種と、得脱の脱果の事具一念三千とがあることを示されている。更に念をおされて

一念三千の佛種に非ずんば有名無実なり、十章抄に云く、一念三千と申すことは迹門すら尚ほ許されず何に況や爾

前に分絶へたる事なり……、但だ真実の依文判義は本門に限るべしと判じたまへり。一切衆生の真実の下種と云ふは、本門の一念三千の妙法蓮華経是れなり

と本地別体門の本門一品二半の寿量品に、顕わし説いた本因果国事具三千に、脱果の事具三千と佛種の事具三千があることをお示しになられたのである。

即ち脱の事具三千は、久遠本因妙の元初に於て下種した佛種に依つて佛果を証得した一念三千の妙法である。故に此の脱の事具一念三千の妙法は、本因妙に於て下種した佛種に依るのであるから、此の脱果の事具三千の中には、本有として佛種の事具三千が具備しており、これを脱果の種とも、脱中の種とも名けるのである。

而して、この種脱の区別は全く別の物があつて、種と脱とに分けるのではない。即ち私新抄に

下種の妙法得脱の妙法とて二つ無し、惑の厚薄に依て前後したる計りなり。仍て衆生の成佛は下種が本なり。故に

「脱は現に在りと雖も具に本種に騰る」

と御指南されて、所被の機根の惑の厚薄に依つて、前に下種し後に得脱する種と脱が分れるので、佛種を下種するより外に得脱する脱果が別にあるのではないのである。即ち爾前迹門等の垂迹の諸経を破して本地別体門の一品二半の寿量品に於て顕わし説いた脱果の事具三千、其の脱果の中にある佛種をあらわしたのが事具一念三千である。従つて、下種とは佛種を下種したことであり、佛種を下種することである。脱果は下種した佛種が現在に顕われたことである。故に—脱果は現在に在るけれども、その脱果の実体は佛種であるから、本の下種した佛種に帰するのである—から、佛種を顕わさなければ、佛果の脱果は定まらないのである。此の様に事具一念三千の種と脱を雙べて一体とするのは、此れは一応所被の機に依つて論じたものであり。その観点から佛種より外に得脱した佛果が別に存在するも

のではないことを知らねばならないのである。

3、本地総別二門の佛種

本地の妙法蓮華経に総別の二義があることを曾谷殿御返事に

又是には総別の二義あり。総別の二義少しも相そむけば成佛思ひもよらず、六道輪廻の基なり

とあり、本地の総別は迹中の諸経に超過する総別であつて、総は別を総し別は総を別すと釈され、また総は総括総摂する意味でもあり、能生能開能摂の意味でもある。別は分別、別出する意味で、所生所開所摂の意味でもある。

偖て、前述した如く本地別体門の本門一品二半の寿量品に於て、爾前権教迹門等の迹中の熟脱の経教の諸法実相の円理（理具一念三千）の法理を破廃した、本地別体門の本門の事具一念三千の佛種についてその概略を論じたように、本地別体門の本地本門一品二半の種子は、久遠本地本因妙の当初に、菩薩道を修行し、下種した佛種子によつて本果妙を証得した時のものであつて、本因果国依正互具事の一念三千の妙法蓮華経（事具三千の妙法）である。

従つて脱果の中の種子であり。久遠の種子でもある。従つて一往、この久遠の種子は、久遠五百億塵点劫の初の本因妙の時に顕わした佛種であつて、この久遠の種子を以て下種し、中間熟益を経て、在世の一品二半で脱益を得たのである。

然し再往この久遠の種子をみるとき、本尊抄にも、

又本門に於ても序正流通あり……

と仰せられているように、本門八品は序正流通ともに末法の始めを詮となし、末法下種の根本を顕わし、別体門の一

品二半の久種を総名妙法蓮華経の能摂に収めるのである。従つて本尊抄の

所謂る一往之を見る時は、久遠を以て下種と為し……再往之を見れば迹門には似ず。本門は序正流通倶に末法の始を以て詮と為す。

と仰せられたのは、久遠の久種下種が在世一品二半で脱益し、その一品二半は脱中の種子として末法には、本門八品総名妙法蓮華経の佛種となる旨を明らかにせられたのである。この本尊抄の文に、日隆聖人が御科文を付されて

且く八品と一品二半とを相対して、脱を以て種に還し、八品に属して末法流化を招く……

と申されたのである。

一往の本門—脱—一品二半—事具一念三千
再往の本門—種—本門八品—妙法蓮華経

この故に本尊抄に

在世の（一往の）本門と末法の始め（再往の本門と）は一同に純円なり

と仰せられたのである。更に

但し彼れは脱、此れは種なり。彼は一品二半（此れは八品）、（彼は一念三千）此は但だ題目の五字なり

と仰せられている。これは「脱」とは、本因本果を互具する本果妙の脱（事具一念三千）であつて、「種」とは本因本果（事具一念三千）を総在する種子下種である。「彼れは一品二半、此れは但だ題目の五字なり」とは影略互顕であつて、この対句を揚顕たならば「彼は一品二半此れは八品、彼れは一念三千、此れは但だ題目の五字なり」となるのである。即ち「彼れは」とは在世正宗の本門であつて、「此れ」とは滅後流通の本門である。「彼れは」能詮の教

たる本地別体門の一品二半であり、「此れは」総体門の八品である。所詮の法体は彼れは別体の本因果国の事具一念三千であり、此れは事具三千を総在する総体の南無妙法蓮華経である。このように本尊抄は、本地の種脱の能詮の教と所詮の法体を相待して示され、本地の総別を相待し本地本門八品の種子を明らかにせられ、別体事具の一念三千を総体たる総名妙法蓮華経に収めて、末法の真の佛種子を明らかにされたものである。

- 総体門—本門八品—総名妙法蓮華経—種—能開
- 別体門—一品二半—事具一念三千——脱—所開

4、佛種と乗種

佛種とは、本地別体門の一品二半、事具一念三千の種子、脱中の種をいう。即ち本門円融実相の境妙と、脱益正意久遠成道報身佛の智妙とが、境智冥合したる常往の法体たる脱果の事具一念三千の種子に対して名付けたものである。

乗種とは、本地総体門の本門八品上行所伝の総名南無妙法蓮華経について名付けたものである。即ち乗種とは五味主の実相たる妙法実相の本境妙と、一佛二名の久遠成道報身の本智妙と、境智冥合したる総名妙法蓮華経の種子のことを称するのである。

従って別体門の一品二半脱益の佛種であるけれども、それを末法本未有善の我等下種の機に移して此れを論じたなれば、単なる脱益の佛種に終ることなく更に境智冥合して乗種たる末法の総種となるのである。その関係を日隆聖人の弘経抄（日隆聖人全集第一巻）の御指南を通じて仰ぐと

高祖云く在世の本門と末法の初めとは一同に純円なり。但し彼は脱、此は種なり。彼は一品二半、此は但題目の五字なりと判じ給へり。

此の本門八品は一向に滅後末法下種の為なり。然るに此の中に一品二半正宗と云ふ方は在世脱益なり。此の脱益も爾前迹門脱益の如きは、諸部円妙一同して約教釈に対せらるべき歟と覚へたる処に、高祖師の一品二半より外は小乗教邪見教未得道教なりと之を破し、爾前迹門の円教は佛種と成らずと判じ給ふ。

故に爾前迹門の脱益と、本門正宗脱益と大に不同なるべしと見へたり。仍て、脱益と云ふ名は同じと云へども、其の義は大に異なれり。

其の故は、爾前迹門の脱益円妙は過去の下種を知らず、故に趙高道鏡が王位に居せんと欲するが如しと破し給ひて、一品二半の脱益をば堅く之を賞翫し給ふ処、現在の脱益と過去の下種と和合して、真実久遠の下種を成ずる故に、一品二半の脱益の成佛をば、真の国王太子王位に登るに譬ふべきなり。

譬へば、爾前迹門の脱益実相の妃は、土民と通じて太子を生じ、本門一品二半の脱益実相の妃は、真の国王に通じて王子を生ずるが如し云云

脱益実相の妃と云ふ方は、爾前迹門本門一同たりと雖も、土民の夫と国王の夫と大いに不同あり。

故に本門一品二半の脱益は、権迹の諸経と共ならず、約教釈にも符せられず、独一無伴の上蔕脱益の妃なり故に、脱益として種より別に置く可らず。雖脱在現具騰本種して、脱を以て種に随へ、種を以て脱を取り。而も種の裏に置て之を用ゆれば、同じく下種と成るなり。

此の時は「彼の脱は此の種」と文点を成すなり。

脱も即ち種に帰し、種は智、脱は境、境智冥合して下種を成ずるなり。

此の意は本門八品の下種の辺なり。本門八品独り真の種子無上の経王なり。

と、一品二半の脱益事具一念三千は爾前迹門の脱益の法と全く異なつた独一無伴の上菓脱益の円妙であつて、この脱益の円妙は「種より別に置く可らず」とある如く、果として捨て置かず、必ず種として活用しなければならないものであるが、どのように活用するかと云えば、雖脱在現具膺本種の種に帰せしめ、新らたに末法本未有善の機のため、本地別体門の一品二半、事の一念三千の境妙の佛種として、独一無伴の王妃上菓として、活用されるのである。即ち久遠成道報身本佛の智妙の相手方の境妙となつて

此の三千（別体事具三千）を以て、妙法蓮華経に裏み、総名を以て下種の法となすなり。（日隆聖人全集第一巻）

と境智冥合した真の佛種子たる乗種（教種とも総種とも云う）を生ずるのである。この乗種は本尊抄に

本門の肝心南無妙法蓮華経の五字に於ては、佛猶文殊薬王等にも之を付嘱したまはず。何に況や其の已下をや、但だ地涌千界を召して八品を説いて之を付嘱したまふ。

と示されている如く、本門八品所顕の種子であつて、事具一念三千は能生たる本門八品より所生されたる種子である。従つて本尊抄に

一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起し五字の内に此の珠を裏み末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ。

と申され、総要能生の南無妙法蓮華経のうちに、別体所生の事具三千が摂せられているのである。故に大聖人は九郎太郎殿御返事に

但た南無妙法蓮華経の七字のみこそ、佛に成る種には候へ

また筒御器抄に

種熟脱の法門、法華経の肝心なり、三世十方の佛は必ず妙法蓮華経の五字を種として佛に成り給へり。

等と申されておられる。このように、乗種たる佛種総名総要の南無妙法蓮華経を必ず下種しなければ成佛は出来ないのである。

故に、成佛は下種佛種（乗種でなければならない）を下し蒔かねば下種とはならないのである。元来、佛種とは佛に咎る種子である。その種子を下種しなければ、その種子は佛種とは云えないのである。従つて下種と佛種は不離一体なものであるわけである。故に佛種の所在は下種の当処にある。佛種は下種に依つてのみ成立するのであつて、下種なきところにある佛種は有名無実の佛種である。

5　大王・王女と佛種

以上の如く、迹中、本地の種子たろ佛種について論じたのであるが、その境妙たる法体が、本迹実相同体であるかの如く誤解されやすい。従つて本迹実相たる母方の所在をはつきりする必要を痛感し、更に大聖人、聖人の仰せを引き爾前権迹等の父方(智)母方(境)等を論じたいと思う。

日隆聖人が、弘経抄で開目抄の秀句の文を

云ふ所の佛母とは厳愛の愛なり。愛は母、厳は父なり。此の佛母の愛とは爾前迹門の円理実相なり。此れ法種分なり。

厳の父は本門発迹顕本本因本果報佛の事なり。此の報佛の下種をば佛種と名づくるなり。

と釈されておられる。即ち、佛母とは爾前迹門、円理実相を譬え、受動者側を指し、父とは、下種を行う種の保持者にして、佛身を譬え、能動者側を指す。

母―円理実相の理―愛―受動者―境
父―本因本果の事―厳―能動者―智

また日蓮大聖人は、本尊抄に無量義経を引いて

無量義経に云く、譬ば国王と夫人と新に王子を生ぜん。若しは一日……王及び夫人愛心偏に重くして常にともに語らん。……諸佛の国王と是の経の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生ず

とあり。また日隆聖人は

法種とは専ら爾前迹門に明す。実相法身を以て母に譬へ、妃に譬へ、王女に譬へ、所縁の境に譬ふ。爾前迹門果頭教主の佛を以て父に譬へ、土民に譬へ、能覚の智に類する境智冥合の妙〇経を、大通王子覆講の時下種する間、父は土民、母は妃たる。「本結大縁寂光為土」の下種なる故に、妃母の方に随へば法種なり。

次に佛種とは、人法の中には人に約し、三身の中には久成報身に約す。「若従二別意一正在二報身一」と云へる寿量品の三世益物の下種の教主是れなり、此の久成の報佛を父に譬へ、諸御抄には天子に譬へ、大王に譬へ国王に譬ふ。

（日隆聖人全集第四巻）

とあつて、受動者と能動者、被下種者と下種者との関係によつて「惣じて成佛と云ふは下種を以て本と為す」と成佛の最終の帰着を明示されたのである。それらを父母子等の譬えを設けて説明されているのである。今、説明の繁を避けるため左に図示すると、

┌実相法身―母―妃―王女―所縁の境／大通王子（本結大縁）―境智冥合―理の一念三千（法種）―偽王子―腹白の子
└爾前迹門 覆講の時
　果頭の佛―父―土民―――能覚の智

┌実相法身―母―妃―王女―所縁の境
└久成報身―父―大王―天子―国王―能覚の智／久遠成（本結大縁）―境智冥合―事の一念三千（佛種）―王子―佛子
　道の時

となる。然しそれらは迹中権実相待に於けるものである。

爾前迹門の成佛と云ふは、土民の父を隠して妃の母方を取り、王子と号し、成佛と称ふる故に、本門一品二半の父大王の種子を顕せば、爾前迹門無得道と云はるゝなり故に本門の意、成佛と云ふは、父大王の種子に約して成佛を論ずる間、本門流通の日蓮宗には、爾前迹門無得道と云ふなり（日隆聖人全集第四巻）

と聖人が申されている如く、成佛は一つにかかつて、父方が土民であるか大王であるか、その種子に依つて爾前迹門の成佛の相違があり、父大王の種子でなければ真実の成佛とは云えぬし、父大王の種子たる一品二半脱益の種子が開顕された後の爾前迹門の佛母実相の辺を取つた土民の種子は、無得道の成佛の種子となる。母方の妃は同一であつても、父方の大王と土民の関係によつて、種子が相違するのである。その結果、能所一体、境智冥合となつた種子の一念三千が違うのである。

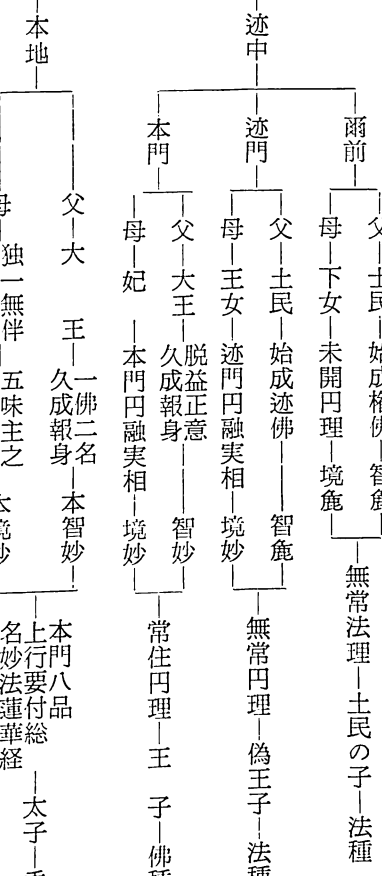
また、父と母と佛種の相違について

声聞生ずと雖も如来の種に非ず。王の夫人と下賤と通ずれば、其の生ずる所の者を王子と名けざるが如し（輔行一）

譬へば王女たりと雖も畜種を懐妊すれば、其の子尚ほ旃陀羅に劣るが如し（本尊抄）

例せば王女と下女と、天子の種子を下さゞれば国主と為らざるが如し（太田抄）

とあつて、爾前迹本の父母子と種子の関係は、この譬えを借りることにより極めて明瞭になる。依つて左に図示すると



以上、述べた事に依つて爾前、迹門、本門の佛種の相異を明瞭にした訳であるが、然し母方の王女に譬えられた円融実相は迹本と名字は異なるが迹本ともに同体である。それは迹中の本迹であるため同体なのである。なんとなれば在世脱益の為の種子であるからである。従つて曾谷抄に

開（本門）未開（迹門）異なれども同じく円なり。此れ迹門の心なり

とあり、また日隆聖人も

玄一、八、権迹本の円理実相の躰同は皆迹門の心なり云云　（日隆聖人全集第九巻）

とあり、これらは共に迹中の本迹実相同体を明らかにされたのである。然し本地と迹中の円理実相は異なる。即ち日隆聖人が

寿量の正意は、正在報身の寿の長遠なり。此の本智照境の実相と、迹中の実相とは永異なり。籤の一に「本門は諸経と一向に異なり、所言の異とは所謂、遠寿諸経に永く無し、故に一向に異なり」と釈するは此の心なり。（日隆聖人全集第九巻）

と仰せられ、また

本門正意の寿の長遠は事円事実相なり、今の六句の実相を釈する故に、「此れは須く本智の境を照すことを指すべし」と云へる久遠の実相は、五味主の躰玄義なり、故に本迹の実相は天地の勝劣なり

既に爾前迹門の実相三千は、十界の佛界の果頭の慈父は始覚土民なり。随て三千実相も定まらずして浮草の如し、本門の因果国の事の三千は能覚の佛界は慈父大王なり。此の大王の本智即本智境照する本地難思の境妙の妙法実相なり。何ぞ本迹の実相、同ならんや。　（日隆聖人全集第九巻）

と仰せられて、母方の王妃妙法実相は、迹中実相円理を廃迹顕本し、本地の本門に説いた本地の実相を顕わし、本地実相の体内に迹中の実相を摂入し、体内に於ては取捨せず能所の勝劣を以て、その相異を分別したものであつて、迹中本門の円理実相と異なる妙法実相であるのである。此の妙法実相と、一佛二名久成報身佛と境智冥合したる佛種子こそ、爾前迹本にない真の佛種子、乗種（教種、総種）なのである。

此の様に、種子について士民と下女、士民と王女、大王と妃、大王と王妃の譬えを挙げて、末法有縁の導師とその

衆生が下種する種子たる本門八品上行所伝本因下種の総名妙法蓮華経の乗種を顕わされたのである。

結

聞きかぢり、聞きかぢりした佛種の問題についてのノートを整理し、上述の如く論じ来たつたのであるが、信解未熟の非才では此の様な大きな問題について手を入れた事に後悔を感じている。然し自分で得心し明らかにしたい思いを深くしている。

本論の「下種の研究」をすすめていく途上の「種」の問題解明の一段階を終えたと思うので、更に「乗種」の問題を深く究明し、最後に「下種」の「種を蒔く」問題に入つていきたいと思う、先師先哲の慧眼を以て小生への愛愍を垂れ、御教示御叱声を衷心よりお願いする次第である。